

「公演批評リスト」（詳細はリスト後）

- ① [ベートーヴェン](#)・ピアノソロ：「ドレスラーの行進曲による9つの変奏曲」と「3つの選帝侯ソナタ2番へ短調」 作品2の3曲 [仲道郁代](#)
- ② ラヴェル『海原の小舟』プロコフィエフ、『ピアノ協奏曲第3番』、モンポウの前奏曲ニ短調（アンコール）、シュミットの『交響曲第4番』、ラフマニノフ『ヴォカリーズ』 [テイエリー・フィツシャー](#)、[イリヤ・ラシユコフスキー](#)
- ③ ピアノソロ…バッハ「フランス組曲大5番」、[モーツァルト](#)『ソナタ第14番』、[ベートーヴェン](#)『自作主題による32の変奏曲』、ショパン『12の練習曲作品25』、[フアリヤ](#)『恐怖の踊り』（アンコール） [石川馨栄子](#)
- ④ ホルスト「日本組曲」、[藤倉大](#)・委嘱新作「フルート協奏曲」、[藤倉](#)「リラ」（アンコール）、「惑星」[ブラビンズ](#)、[クレア・チェイス](#)
- ⑤ ヤナーチェク歌劇「利口な女狐の物語」組曲、マルティヌー「オーボエ協奏曲」、[バッハ](#)「無伴奏チェロ組曲2番」（アンコール）、[ドヴォルザーク](#)「交響曲第8番」
[ロリー・マクドナルド](#)、[ラモン・オルテガ・ケロ](#)

⑥ **チャイコフスキー**『ピアノ協奏曲第2番』、リストの『愛の夢3番』(アンコール)、
『交響曲第6番・悲愴』レオシュ・スワロフスキー、**務川慧悟**

⑦ **ベートーヴェン**『交響曲第4番』、**マ・シユトラウス**『家庭交響曲』小泉和裕

⑧ ショスタコーヴィチ・バレエ「黄金時代」組曲、シユニトケ「ヴィオラ協奏曲」、
ショスタコーヴィチ『交響曲第6番』、**ドミトリ・リス**、**アンドレア・ブルガー**

⑨ スーク「幻想的スケルツォ」、**モーツァルト**「フルート協奏曲第2番」、**ドヴォル**

ザーク「交響曲第7番」、**ドヴォルザーク**『スラブ舞曲集』から、レオシュ・スワ
ロフスキー、**磯貝俊幸**

⑩ **モーツァルト**歌劇「魔笛」序曲、「ピアノ協奏曲第27番」、**プロコフィエフ**「ピ
アノソナタ第7番の3楽章」(アンコール)、ラヴェル「ラ・ヴァルス」、バレエ「ダ
フニスとクロエ」第1、2組曲、**高関健**、**アレクサンデル・ガジエブ**

⑪ **モーツァルト**「ピアノ協奏曲第21番」、ショスタコーヴィチ「交響曲第7番」、
「白鳥の湖」フィナーレ(アンコール)、**川瀬賢太郎**、**菊池洋子**

⑫ **藤倉大**「レア・グラヴィティ」、**ラフマニノフ**「ピアノ協奏曲第2番」、**ラフマニ**

ノフの前奏曲「鐘」(アンコール)、シベリウス「交響曲第1番」、アントニ・ヴィツト、ミハイル・プレトニョフ

⑬ **ベートーヴェン**『ヴァイオリン協奏曲』、ブラームス『交響曲第2番』、パガニーニ『24の奇想曲作品1第16番』(アンコール)、モーシェ・アツモン、**イリア・グリソルツ** (グアネリ・デリ・ジェス)

⑭ **チャイコフスキー**「ヴァイオリン協奏曲」、イザイ「無伴奏ヴァイオリンソナタ2番」の第1と2楽章、**チャイコフスキー**『交響曲第3番』、レオシュ・スワロスキ、**アンドレア・オビソ**

⑮ 吉松隆『鳥は静かに』、**チャイコフスキー**『ヴァイオリン協奏曲』、バッハ『無伴奏ソナタ第3番の3楽章』(アンコール) ショスタコーヴィッチ『交響曲第12番』
川瀬賢太郎、**ノア・ベンディックス//バルグリー**

⑯ **モーツァルト**歌劇『ドン・ジョヴァンニ』序曲、**モーツァルト**『クラリネット協奏曲』、『クラリネットロジア』(チャーリー・パーカーによる)(アンコール)、モンカーヨ『ウアパンゴ』、マルケス『ダンソン第2番』。ヒナステラ『エスタンシア』組

曲、『マランボ』（アンコール）アロンドラ・デ・ラ・パオーラ、[アレッサンドロ・カル](#)

[ボナーレ](#)

⑰ グリンカ歌劇『ルスランとリュドミラ』序曲、プロコフィエフ『ヴァイオリン協奏曲2番』、バッハのサラバンド・ニ短調（アンコール）、[チャイコフスキー](#)『交響曲

[第5番](#)』[レオシュ・スワロスキー](#)、[アンドレイ・バラノフ](#)

⑱ ヤナーチェク歌劇『死者の家から』組曲、伊福部昭『ラウダ・コンチェルタータ』、

『故郷』（アンコール）、マリン・ゴレミノフ『弦楽のための5つのスケッチ』、ヤナーチェク『シンフォニエッタ』、ロツセン・ゲルゴフ、[大茂絵里子](#)

⑲ [モーツァルト](#)『ホルン協奏曲第1番』、歌劇『皇帝ティートの慈悲』序曲、『ホルン協奏曲第4番』、ロツシーニ『狩のランデヴー』（アンコール）、[チャイコフスキー](#)

『マンフレッド交響曲』、ユベール・スダーン、[アレッシオ・アレグリーニ](#)

⑳ デュティユー《遙かなる遠い国へ》、《ザッハーの名による3つのストロフ》（アンコール）、メンデルスゾーンの《真夏の夜の夢》、ティエリー・フィツシャー、[ニコラ・](#)

[アルトシユテット](#)

21 ワーグナー楽劇《ジークフリート》全3幕

22 ブラームス『ヴァイオリン・ソナタ』全曲、「ヴァイオリン・ソナチネ」(アンコール) **セルゲ・ツインマン**、**伊藤恵**

23 マーラー『交響曲第8番』、**小泉和裕**

24 ショスタコーヴィチ『スケルツォ嬰へ短調』、『ヴァイオリン協奏曲第1番』、**バツハ**の無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第3番ホ長調より「ロンド風ガヴォット」(アンコール)、**プロコフィエフ**『ロメオとジュリエット』**円光寺雅彦**、**辻彩奈**

25 藤倉大『ソラリス』組曲、**ドヴォルザーク**『ヴァイオリン協奏曲』、**プロコフィ**

エフの『無伴奏ヴァイオリンソナタ二楽章』(アンコール)、**チャイコフスキー**『交響曲第5番』、**アントニ・ヴェット**、**ヴェロニカ・エーヴェルレ**(ドラゴネッティ)

26 スメタナの連作交響詩『わが祖国』**レオシュ・スワロフスキー**

27 **バッハ**『ブランデンブルク協奏曲』**中野振一郎**(チェンバロ、指揮)、**鈴木俊哉**、**田中せい子**(リコーダー)、**オットー・ザウター**(ピッコロ・トランペット)、**島田真**

千子(ヴァイオリン)、**安原太武郎**(オーボエ)(つづく)

仲道郁代 ベートーヴェン 鍵盤の宇宙 第1回「誕生」(2013.12.17)

仲道のトーク、スライドを交えながらのショパン連続演奏会に続く、ベートーヴェンの全ソナタほかを6年間12回のコンサートのなかで網羅する壮大な企画1回目。前半は、ベートーヴェンの象徴となり最後のピアノソナタ32番と同じハ短調であるシンボリックな作品であるとの解説のあとに「ドレスラーの行進曲による9つの変奏曲」と「3つの選帝侯ソナタ2番へ短調」。

後半は、ハイドンに献呈された**作品2の3曲**。3作品12楽章の全てにおいて新たな試みに挑戦したベートーヴェンの熱意を熱く語った後、重厚な音響、対照的な軽快で繊細な音色を楽章ごとに楽しませてくれた。特に3作品のなかでスケールの大きい第3番は、ピアノ協奏曲に匹敵するような作品と自ら説明するように、奥行きのある濃厚な響き、管楽器の明朗な響き、洗練された構成感で本人が納得しながら演奏しているのが伺えた。初心者も専門家も楽しめる

ベートーヴェン企画である。(12月17日、しらかわホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第403回定期演奏会(2014.6.14)

ガイアシリーズ第3弾、副題は「水―波に翻弄される舟」。名誉客演指揮者のテイエリー・フィッシャーの得意とするラヴェルの『海原の小舟』から、風のように軽やかに始まった。今回のハイライトのひとつであるプロコフィエフの野性的なエネルギーで溢れる『ピアノ協奏曲第

3番』は、第8回浜松国際ピアノコンクールで第1位に輝いたイリヤ・ラシニコフスキーにより、卓抜したテクニックとドラマチックな表現力で演奏された。アンコールは、対照的な、繊細な響きのモンポウの前奏曲ニ短調を演奏。今後の活躍が期待される。後半のメインは、シュミットの『交響曲第4番』。冒頭の半音階的進行で不安定な表情のトランペットの主題が展開され、叙情的なチェロの旋律を挟み、トランペットの主題が回想される様は、川の流れるを感じるような流麗な演奏であった。最後は、ラフマニノフの『ヴォカリーズ』の切ない旋律を透明感

のある好演で聞かせた。(6月14日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

石川馨栄子ピアノリサイタル (2015.2.14)

2002年デビュー以来、名古屋を中心に定期的にリサイタルを開催し、精力的に活動しているピアニストの石川馨栄子。今回のプログラムは、組曲、変奏曲、練習曲という小品が集まった形式による作品に焦点をあてる。最初のバッハの「フランス組曲大5番」は、華麗で生き生きとした響きで奏で、ホール残響音が交錯しチェンバロのような音色を生み出していた。続くベートーヴェンに影響を与え、モーツァルトにははめずらしい短調の『ソナタ第14番』のあとに、同じハ短調のベートーヴェンの『自作主題による32の変奏曲』は、壮大で劇的な展開をうまく構築した。最後は、ショパンの『12の練習曲作品25』。個性的かつ技巧的な一つ一つの小品を研磨させ、全体を通した作品として構築する能力を必要とする意欲的なプログラムであった。アンコールは小品2曲。軽快で華やかな演奏により、民族的でリズムカルなフアリアの『恐怖の踊り』で終えた。(2月14日、ザ・コンサートホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第430回定期演奏会 (2015.12.12)

「メタ」シリーズ「日本民謡の昇華」は、常任指揮者ブラビンスによる英国作品集で、日本の民謡調の旋律を駆使したホルスト「日本組曲」から始まる。2作目は、名フィルコンポーザー・イン・レジデンスで、イギリス在住の作曲家、藤倉大への委嘱新作「フルート協奏曲」。

5つの部分で、フルート、ピッコロ、コントラバス、バスの4本のフルートの特徴を生かし、息、声、倍音などの複雑な音響がオーケストラと美しく織り交ざる。珍しいコントラバスは、カデンツァの部分を繊細な音色で奏でる。終演後、クレア・チェイスにより演奏された藤倉の「リラ」は、この作品の素材を生かしたコントラバスと管フルートの作品で、協奏曲でも効果的であった下降グリッサンドなどを含み、両作品とも藤倉の作品を理解した素晴らしい演奏であった。後半の大編成の「惑星」は、愛知県立芸術大学女性合唱団も加わり、7曲の味を生かした演

奏で魅了した。(12月12日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第432回定期演奏会 (2016.2.20)

「メタ」シリーズ「物語の再編」は、名フィルと3回目となる指揮者、ロリー・マクドナルドの切望したチェコの作曲家による作品特集で、ヤナーチェクの歌劇「利口な女狐の物語」組曲から、ミステリアスな民族的な旋律で始まる。様々な場面の凝縮されたマツケラス編の組曲は、豊かな音色で物語を語った。次のマルティヌーの「オーボエ協奏曲」では、バイエルン放送響の注目若手首席オーボエのラモン・オルテガ・ケロを迎える。オーケストラにとけ込むような透明感のあるオーボエの暖かい音色で始まり、2、3楽章のテクニカルなパッセージや郷愁を誘う抒情的な旋律を含んだソロの部分は多彩な音色で観客を魅了した。アンコールには、バッハの「無伴奏チェロ組曲2番」からジークを華麗に奏でる。最後のドヴォルザークの「交響曲第8番」は、金管楽器の不安定なバランスに気になるところがあったものの、緊迫感のある熱演であった。(2月20日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

セントラル愛知交響楽団 第146回定期演奏会 (2016.3.4)

今回の公演は、チャイコフスキーの2作品に焦点をあてる。前半は、

『ピアノ協奏曲第2番』。この作品を何度もヨーロッパで指揮してきた

レオシュ・スワロスキー、第1番をセントラル愛知と共演した経験があ

るピアニストの**務川慧悟**、この2人のチャイコフスキーのピアノ協奏曲

への深い理解と解釈による演奏であった。2楽章は、今回のジロティ編

曲ではヴァイオリンとチェロの二重奏がカットされているが、ピアノト

リオの箇所は、抒情的な美しい響きで観客を魅了した。ピアニスティッ

クな華やかな技巧、重量感をもったこの作品を、自分の世界観で巧みに

表現し観客を虜にしたパリ在住の若手ピアニスト務川の今後の国際的な

活躍が期待される。アンコールは、リストの『愛の夢3番』。後半は、

『交響曲第6番・悲愴』。スワロフスキーによる絶妙な音響バランスと

テンポ感による緊張感のある熱演により、この名曲を飽きる事なく堪能

することができた。(3月4日、しらかわホール) (伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第434回定期演奏会 (2016.4.16)

名フィル創立50周年開幕は、音楽監督・小泉和裕の就任披露公演から始まった。「基本の重視」と「指揮者とオーケストラは家族」をテーマにより選曲されていた。前半は、ベートーヴェンの『交響曲第4番』。

古典的なスタイルが確立され、均整がとれ洗練されたこの作品を、丁寧に磨き上げ、明朗で音響のバランスが研ぎすまされた、緊張感のある演奏であった。後半は、R・シュトラウスの4管の大編成による『家庭交響曲』。切れ目なく演奏される単一楽章で、家庭の各々の人物の特徴を描写するテーマが、全体を通して様々な楽器や形を変え登場する。各々の楽器の特徴的な音色がバランスよくオーケストラに反映され、後半の金管楽器の跳躍やハイピッチの多用されている華やかなクライマックスでも、各々の楽器の役割が、歯切れのよい快活な演奏で堪能できた。新

音楽監督を迎えて、指揮者、奏者全員の気迫が感じられ、今後の進展が

楽しみである。(4月16日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第435回定期演奏会(2016.5.20)

今回は、芸術監督、首席指揮者としてウラル・フィルの評価を躍進させたロシアのドミトリー・リスにより、ソビエト連邦が生んだ2人の国際的作曲家による作品に焦点をあてた。1曲目は、ショスタコーヴイチのバレエ「黄金時代」組曲から3作品。ワルツ、マーチなどの目まぐるしい場面転換を、諧謔的で軽妙巧みな表現で観客を惹き付けた。

2曲目は、昨年、東京国際ヴィオラコンクールで優勝したスイス人のアンドレア・ブルガーをソリストに迎えて、シュニトケの「ヴィオラ協奏曲」。ユーリ・バシユメトからの依頼により書かれたもので、高度な技巧と音楽性を必要とし、独奏部分が多い作品であるが、ブルガーによる見事な技術により情熱的に表現された。後半は、ショスタコーヴイチの『交響曲第6番』。ロシア的な熱い情熱的で執拗な重々しさや、

皮肉っぽい諧謔さを、同国人であるリスにより、絶妙な表現によりうま

く引出していた。(5月20日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

セントラル愛知交響楽団 第148回定期演奏会 (2016.6.10)

今回のプログラムは、「民族の誇りとロマン」をテーマにチェコを代表する作曲家の一人、スークの「幻想的スケルツォ」から始まる。ドヴォルザークの影響を強く受けており、民族的な旋律を明朗、軽快にまとめあげた。次のモーツァルトの「フルート協奏曲第2番」では、セントラルのフルート奏者である磯貝俊幸によるソロ。スワロスキーがオーケストラとのバランスを微妙に調整するなか、カデンツァも優雅に吹きこなし、まとめあげた。磯貝は、この地域で人気があるようだ。後半は、ドヴォルザークの「交響曲第7番」。作曲者と同国のチェコ生まれの指揮者のレオシュ・スワロフスキーは、3楽章では、ボヘミアの舞曲を明朗に歌い、情熱的に4楽章を歌い上げた。アンコールは、同じくドヴォルザークのスラブ舞曲集から、憂愁なヴァイオリンの旋律で人気のある作品72-2を、民族的な響きと哀愁を込めて、コンサートを締めくくった。(6月10日、しらかわホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第436回定期演奏会(2016.6.17)

今回の創立50周年シリーズは、前半はモーツァルト、後半はラヴェルの構成。1曲目は、オペラの指揮でも定評のある**高関健**により、歌劇

「魔笛」序曲から、明朗に軽やかに始める。2曲目は、「ピアノ協奏曲

第27番」。昨年、浜松国際ピアノコンクールで優勝した国際的に活躍

する若手のピアニスト、**アレクサンデル・ガジェブ**によるソロ。優美

で美しい旋律を歌い上げ、アンコールは、モーツァルトとは対照的な、

情熱的で難曲であるプロコフィエフの「ピアノソナタ第7番の3楽

章」を、熱演し喝采をあびる。後半のラヴェルは、「ラ・ヴァルス」

から始まる。心地よいワルツのリズムにのり、ラヴェルらしい上品な音

響の変容をうまく表現していた。最後のバレエ「ダフニスとクロエ」

第1、2組曲では、大編成で色彩豊かな作品を、各々の楽器の洗練され

た響きと、幻想的な雰囲気、緻密に構築させた。

(6月17日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

神奈川フィル十名フィルスペシャル・ジョイント・コンサート

名フィル、神奈川フィルの両団体に関わっている指揮者の川瀬賢太郎による、2つの楽団のメンバーによる共演となった。前半は、モーツァルト弾きとして国際的に活発に活動を行うピアニストの菊池洋子をソリストに迎えて、「ピアノ協奏曲第21番」。2楽章は、菊池により天井の音楽のような澄んだ響きで満たされた。3楽章は、快活で装飾的なピアニスティックな旋律とオーケストラとの対話をバランスよくまとめた。後半は、シヨスタコーヴィチの「交響曲第7番」。トータル130名の奏者で、長大な作品である。指揮者の川瀬は、各々の楽章に作曲者の熱い想いが込められた大作をうまく音響的に構築し、様々な楽器のソリストイックな演奏も、聞き手を楽しませた。アンコールは、「白鳥の湖」フィナーレ。両楽団による共演の為に、特別な緊張感が各々の奏者に生まれ、演奏にもいい影響があつたのではないか。(6月27日、日本特殊

陶業市民会館フォレストホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第439回定期演奏会(2016.10.22)

ポーランド人の世界的指揮者、アントニ・ヴェットにより、藤倉大の

「レア・グラヴィティ」から10月定演は始まる。弦楽器のハーモニ

クスと2台のヴィブラフォンによる緊張感のある音響で始まり、複雑な

音色が絶えず変容し作品を構成する。音の流れ、浮遊感に満たされた充

実感を得た。2曲目は、ラフマニノフの「ピアノ協奏曲第2番」。ロ

シア人のミハイル・プレトニョフのピアノは、一つ一つの音を真摯に

聴き込みながら、美しい音色を知的に構築していく。派手な演奏で圧倒

するのではなく、多彩な音色を使い分け、オーケストラとのバランスも

緻密にコントロールし、客観的な立場で全体を見通しているような彼の

世界観で観客を引き込んだ。アンコールは、ラフマニノフの前奏曲「鐘」。

多彩な美しい鐘の音色の創造は、息を呑むほどであった。最後のシベリ

ウスの「交響曲第1番」では、民族色や劇的な構成を丁寧にとまめ好

演であった。(10月22日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第441回定期演奏会(2016.12.9)

今回の公演は、来週「第九演奏会」で現役引退公演となる名誉指揮者
モーシエ・アツモンの指揮で、ベートーヴェンの『ヴァイオリン協
奏曲』、ブラームスの『交響曲第2番』。前半のベートーヴェンは、イ
リア・グリンゴルツのヴァイオリン独奏による。グアネリ・デリ・ジ
ェスの名器の音色は、彼の繊細な演奏により透明感のある多彩な音響を
醸し出した。アンコールの、ヴァイオリンの超絶技巧作品、パガニーニ
の『24の奇想曲作品1第16番』では、喝采をあびる。後半のブラ
ームス2番は、アツモンの思い入れの強い作品で、本人の希望により3
番からの変更となったそうである。若い頃ホルンを専攻していたことも
あるようで、想いが込められてか歌い込まれたホルンの牧歌的なテーマ
は印象的であった。終演後の長いカーテンコール、花束を贈られたアツ
モンの姿からは、自分の十八番での伸び伸びとした演奏による達成感が
感じられた。(12月9日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

セントラル愛知交響楽団 第154回定期演奏会 (2017.5.12)

第5回宗次エンジェルヴァイオリンコンクールのセミファイナル出場・特別楽器貸与の助成を受けている**アンドレア・オビソ**による**チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲**。テーマの変容を音色や響きを駆使しながら飽きさせずに、作品をうまく構築。牧歌的な2楽章、ヴァイオリンソロは、管楽器との掛け合いを聴き込んでバランスよく応答。3楽章は、エネルギーにスピード感にのり念入りに歌い込み、観客を魅了した。**イザイの無伴奏ヴァイオリンソナタ2番の第1と2楽章**の2曲をアンコールで演奏。透明感のある繊細な静かな作品も美しく歌い上げた。後半は、**チャイコフスキー交響曲第3番**。第1楽章、弦楽器のミステリアスな出だしに始まった後の管楽器の掛け合いが、不安定なバランスで響きに潤いが欠けていた。後半にかけては勢いにのりパワフルにまとめあげる。終楽章は、掛け合いも明瞭にティンパニの決然とした響きとともに爽快に駆け抜けた。(5月12日、しらかわホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第446回定期演奏会(2017.6.2)

「ロシア革命100年」をテーマとした本公演は、指揮者、川瀬賢太郎により、吉松隆の弦楽合奏による美しい響きで満たされる『鳥は静かに』から始まる。コンサートマスターの後藤龍伸の哀愁漂うソロともに、弦楽の緊張感のある響きによる短い哀歌のあと、ベルリン・フィルコンサートマスターであるノア・ベンディックス//バルグリーを迎えて、チャイコフスキーの『ヴァイオリン協奏曲』。緻密に洗練されたアゴーギグによる円熟して深みのある演奏で歌い込まれた彼の演奏に、バランスよくオーケストラが応え、観客を魅了させた。アンコールは、バッハの『無伴奏ソナタ第3番の3楽章』。後半は、シヨスタコーヴイッチの『交響曲第12番』。ロシア革命を具体化し、レーニンを偲んで作曲された切れ目無く演奏される4楽章による厚い緊張感のある響きをうまくまとめあげた。安定した響きのティンパニを始め打楽器郡が根

底を支え高揚させた。(6月2日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第448回定期演奏会(2017.7.22)

「メキシコシティ・マイ・メキシカン・ソウル」をテーマとし、メキシコから国際的に活躍するアロンドラ・デ・ラ・パーラを迎え、モーツァルトの歌劇『ドン・ジョヴァンニ』序曲から軽やかに始めた。次のモーツァルト『クラリネット協奏曲』は、アレツサンドロ・カルボナノレのソロにより、繊細な音色を駆使し歌い込む。アンコールでは、『クラリネットロジア』（チャーリー・パーカーによる）で即興的にミカルに音楽を表現し観客を魅了した。後半は、アロンドラ・デ・ラ・パーラの得意とする情熱的なダンスのリズムを特徴とするラテン・アメリカの作曲家の作品に焦点をあてる。ラテン系の多種多様な打楽器を使用したメキシコからモンカーヨ『ウアパンゴ』、マルケスの『ダンスン第2番』。最後のエネルギッシュなヒナステラの『エスタンシア』組曲で更に盛り上げ、アンコールで再度、第4番の『マランボ』を熱演し、観客総立ちで幕を閉じた。（7月22日、愛知県芸術劇場コンサートホール）

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第450回定期演奏会(2017.10.6)

本公演は、「名古屋・名古屋の歌声とともに・宗教改革500年」をテーマに、2大作品に焦点をあてる。前半は、メンデルスゾーンの『交

響曲第5番ニ長調・宗教改革』。後半は、今回のメインとなるオーケ

ストラ、合唱団、ソリストを含めて総勢300人を超え視覚的にもインパクトがある壮大な大曲であるオルフの世俗カンタータ『カルミナ・

ブラーナ』。出だし、男声合唱が少々不安定で、合唱団のバランスにはらつきがあったものの、曲が進むにつれてオーケストラとの調和もとれ作品をまとめあげた。出番はそれほどないものの名古屋少年少女合唱団の歌声は、美しかった。3名のソリストでは、出番の多いバリトンのトーマス・パウアーの

特筆すべきは、プログラムの解説のみならず、全25曲の合唱作品の水野みか子史による日本語訳が別紙として挟まれていたことである。

(10月6日、日本特殊陶業市民会館フォレストホール)(伊藤美由紀)

セントラル愛知交響楽団 第158回定期演奏会 (2017.11.24)

音楽監督であるレオシュ・スワロフスキ―指揮によるロシアの作曲家によるプログラム。決然とトゥツティで始まり、軽快で切れ味のいい弦楽器のパッセージ、美しい第2主題、グリンカによる歌劇『ルスランとリュドミラ』序曲で、爽快な気分により1曲目を引き締める。次のプロコフィエフ『ヴァイオリン協奏曲2番』は、アンドレイ・バラノフによる圧倒的な集中力と歌い込まれた表現力の高さにより、冒頭のソロから一気に観客を魅了した。2楽章の優美で透明感のある音色は、更に音響を聴き込んで演奏された。アンコールは、バッハのサラバンド・ニ短調。ホールの音響の素晴らしさが引き立つ曲を選んだと述べたように、しっとりとした深みのある演奏であった。後半は、チャイコフスキ―『交響曲第5番』。「運命の動機」が全楽章を通じて、色彩豊かに展開され全体を統一し、終楽章では、壮大な響きに昇華され、時間を感じさせない惹かれる演奏であった。(11月24日、しらかわホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第456回定期演奏会(2018.4.21)

文豪にちなんだ作品をとりあげる新シリーズ、〈文豪クラシック〉の一回目は、ドフトエフスキーの監獄での体験談を元にした『死の家の記憶』に基づいたヤナーチェクの歌劇『死者の家から』組曲から。悲痛な叫びを表現した重々しい音響、金管楽器の独特の煌めきをうまく表現。2曲目は、マリンバの大茂絵里子を迎え、伊福部昭の『ラウダ・コンチエルトータ』。祈るような旋律、野性的な音色、土俗的なリズム感を含む単一楽章作品を、緊張感のある演奏で弾ききった。大茂は、愛知県立芸術大学卒業で、地元のアンの為か、アンコールは『故郷』。後半は、ブルガリア生まれの指揮者、ロッセン・ゲルゴフによる選曲で、同国のマリン・ゴレミノフの『弦楽のための5つのスケッチ』。親しみ易い旋律を美しく奏でた。最後は、25名の金管楽器による華やかなファンファーレから始まるヤナーチェクの『シンフォニエッタ』をドラマ

チックにまとめた。(4月21日、日本特殊陶業市民会館フォレストホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第457回定期演奏会(2018.5.19)

文豪クラシックシリーズの第2弾は、バイロンの『マンフレッド』。前半はモーツァルト作品。アレッシオ・アレグリーニを迎えて、一般にも馴染みのある明朗な旋律の『ホルン協奏曲第1番』を軽快にまとめた。次の歌劇『皇帝ティートの慈悲』序曲は、オペラハウスでも国際的に活躍する指揮者ユベール・スダーンにより、ダイナミックな低音弦ではじめ、音色を丁寧に扱った管楽器の二重奏を上品に挟んだ。『ホルン協奏曲第4番』では、ホルンの男性的な音色、ロマン的で甘い響き、軽快さなどの繊細な魅力を引出した。アンコールは、ロッシーニの『狩のランデヴー』で聴衆を沸かせた。後半は、1時間弱もあり、打楽器5名、ハープ2台の大編成のチャイコフスキー『マンフレッド交響曲』。強弱記号 **mf** までの迫力で、マンフレッドの執拗な苦悩、嘆きを飽きさせずに音で表現した。終楽章にパイプオルガンを含む改訂版でも是非聴いてみたい。(5月19日、日本特殊陶業市民会館フォレストホール)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第459回定期演奏会(2018.7.14)

文豪クラシックシリーズの第4弾。デュティユーの《遙かなる遠い国へ》。ボードレールの『悪の華』をもとに彼の象徴的、神秘的で夢のような世界観をニコラ・アルトシユテットのチェロの繊細で研ぎすまされた緊張感でみごとに表現した。打楽器とチェロの交錯した音響の美しさに心を奪われた。アンコールでは、周知の名曲ではなく、あえて、デュティユーの難曲《ザツハーの名による3つのストロフ》を選び、色彩豊かなチェロの響きで聴衆を魅了した。アンコールのせいか、聴衆の集中度が高かった。後半はメンデルスゾーンの《真夏の夜の夢》から台詞の含むメロドラマの部分を省いた8曲。名誉客演指揮者ティエリ・フィッシャーにより軽快で哀愁漂う旋律による序曲に始まり、第3曲で盛田麻央、富岡明子による重唱、愛知県立芸術大学女声合唱団を含み優雅で爽やかに歌い上げた。第7曲の聴き所であるホルンのミスが気になった。(7月14日、日本特殊陶業市民会館フォレストホール)(伊藤美由紀)

愛知祝祭管弦楽団 ワーグナー楽劇《ジークフリート》全3幕

愛知祝祭管弦楽団が4年かけて取り組んでいる《ニーベルングの指環》

4部作の第3作目。2作の公演を見ていないので比較はできないが、ア

マチュア・オーケストラが、総譜通りの大編成で省略なくこの作品の演

奏を成し遂げたのは、音楽監督であり指揮者の三澤洋史の指導、熱意に

よるであろう。残念ながら、会場が歌舞伎などを主体とする劇場であり、

音が分離し音響バランスのよく無い状態であった。各幕の異なった照明、

東海児童合唱団によるダンス、パントマイムを応用した大蛇ファフナー

や小鳥の演出、マイクでエコーをかけたファフナーの声の音響効果では、

舞台前方で歌う演奏会形式にアクセントをもたせた。体調が悪いとのア

ナウンスがあつた片寄純也（ジークフリート）も、最後の愛の二重奏ま

で、歌いにくい音響の悪条件の中、深遠なワーグナーの世界を歌いきつ

た。青山貴（さすらい人）、基村昌代（ブリュンヒルデ）は、役にはま

つた迫力のある表現力であつた。（9月2日、御園座）（伊藤美由紀）

セルゲ・ツインマーマン（ヴァイオリン）、伊藤恵（ピアノ）

音楽一家に育ち、国際的に活躍するヴァイオリニストのフランク・ペーター・ツインマーマンを父にもつ若手の将来有望なヴァイオリニストとベテランのピアニスト伊藤恵によるブラームスのヴァイオリン・ソナタ全曲演奏会。座席がホール最後部の左端で、音響のバランスが心配であったが、1曲目のソナタ2番が始まると同時に、繊細な美しい響き、奥深い表現力に聴き入ってしまった。特に緩徐楽章である2楽章の暖かく柔らかい弦の響きとピアノと対位的な掛け合いは、心に響いた。細やかな強弱、表情の変化で、残響を聴き入るように繊細な音をコントロールし、ブラームスの深みのある精神世界をピアニストともに緻密に作り上げた。客席中央であれば、最高の音響を誇る宗次ホールのベストなバランスで、弦の残響を堪能できたであろう。アンコールは、シューベルトのヴァイオリン・ソナチネニ長調2楽章から。今後の活躍に注目したい演奏家の一人である。（9月6日、宗次ホール）（伊藤美由紀）

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第461回定期演奏会(2018.10.12)

音楽監督 小泉和裕の指揮、中部フィルとの共演でマーラー『交響曲第

8番』。8名の独唱(並河寿美、大隅智佳子、三宅理恵、加納悦子、

福原寿美枝、望月哲也、宮本益光、久保和範)に、愛知県内の7合唱

団を含め、総勢約500名によりマーラーの描いた大宇宙が響き渡った。

1部の壮大なクライマックス後の2部の管弦による静かな緊張感のある

音画的な導入部、続く合唱との絶妙なバランス、場面ごとの繊細で磨か

れた表現力。独唱陣が楽団後部に配置していた為、2部最初のバリトン、

バスが観客まで明瞭に届かなかった部分があり残念。並河、加納、福原

によるソロ、愛の主題による三重奏は深みのある声質で、観客側上方で

歌った三宅(栄光の聖母)は、繊細に歌い上げた。「神秘の合唱」が緊張

感の頂点に達し金管のバンドも加わり重厚で輝かしい音響で結んだ直後

の観客のブラボーは、指揮者の動きを無視し、余韻をかき消してしまっ

たが。(10月12日、日本特殊陶業市民会館フォレストホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第462回定期演奏会(2018.11.23)

二月名フィル定期は、**円光寺雅彦**・指揮によりシヨスタコーヴィチ1

3歳の古典的な作風の『スケルツォ嬰へ短調』から、色彩豊かに爽快

に始まった。次のシヨスタコーヴィチ『ヴァイオリン協奏曲第1番』

では、11歳の時に名フィルと初共演をし、近年、国際コンクール等の

華々しい功績を残し活躍中の岐阜県出身20歳の**辻彩奈**をソリストに迎

える。1楽章では陰鬱で瞑想的な無限旋律を歌い込み、2楽章では重音

奏法で技巧的パッセージをエネルギーギッシュに弾きあげ、3楽章のカデン

ツアで圧倒的なテクニックと音楽性で観客を魅了した。アンコールは、

バッハの無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第3番ホ長調より

「**ロンド風ガヴオット**」。来年度バッハ無伴奏ヴァイリンソナタ&パル

ティータ全曲演奏会が予定されており期待が膨らむ。後半は**プロコフィ**

エフ『**ロメオとジュリエット**』から9曲の抜粋。金管の重量感、劇的

な場面を効果的にまとめた。(二月23日、日本特殊陶業市民会館フォレストホール)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第465回定期演奏会(2019.2.23)

ポーランド人の世界的指揮者、アントニ・ヴェイツトにより、藤倉大の『ソラリス』組曲の世界初演から始まる。2016年の定期でも彼の作品を指揮しており、彼の作品の繊細で複雑な響きを深く理解していることが伺える。プレトークで作曲家による説明があったので、オペラを見ていなくても曲から視覚的イメージを感じられ、緊張感のある響きの変化を楽しむ事ができた。ドヴォルザーク『ヴァイオリン協奏曲』は、ヴェロニカ・エーヴェルレによる独奏。彼女の技量、音楽性により導かれた情熱的、民族的な旋律は、名器ドラゴネットの魅力を最大限に引出した。アンコールのプロコフィエフの『無伴奏ヴァイオリンソナタ二楽章』で更に観客を魅了した。後半は、チャイコフスキー『交響曲第5番』。運命の動機、民族的哀愁の漂う旋律により繰り広げられる重量感のあるカラフルな音空間で楽しませてくれた。指揮者自身、満喫

したことが伝わってきた。(2月23日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

セントラル愛知交響楽団 第167回定期演奏会 (2019.3.15)

本公演は、音楽監督レオシュ・スワロフスキー指揮による五年間の集大成となる最後の記念すべき公演となった。この5年間、彼の指導によりセントラル愛知の表現力、音楽性ともに飛躍的進歩を遂げたように感じた。チェコ生まれのスワロフスキーの母国を代表する作曲家スメタナの連作交響詩『わが祖国』で最後を締めくくった。第1曲目の出だしのハープの二重奏は、悠久の時の流れを感じるように染渡った。第2曲のモルダウ、第3曲のシャルカのテーマを演奏するクラリネットのソロにより、チェコの田園風景を繰り広げ、観客を魅了した。第4曲のフーガ、国民的舞踏のポルカでチェコの雄大な自然を盛大に描写する。第5、6曲と重量感のある金管、ティンパニとともに壮大なクライマックスにまとめあげた。演奏後の彼の表情は、全て出し切ったという満足感で満ち足りていた。4月からの新指揮者との新たなセントラル愛知の

活動が期待される。(3月15日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

セントラル愛知交響楽団 第168回定期演奏会 (2019.3.15)

中野振一郎 (チェンバロ、指揮、トーク) による3回にわたるセント

ラル愛知との共演、1回目は豪華ゲストを迎えてバツハ『ブランデン

ブルク協奏曲』全曲プログラム。疾走感溢れるエネルギーな3番

から始め、2楽章にはカデンツァを挿入しチェンバロの音色、存在感を

印象づけた。4番は、リコーダーの鈴木俊哉、田中せい子、ヴァイオ

リンの島田真千子がソロに加わり、リコーダーの哀愁漂う掛け合い、ヴ

ァイオリンの技巧で楽しませた。1番はホルンのバランスが気になった。

リコーダーの鈴木、ヴァイオリンの島田に加え、トランペットのオット

ー・ザウター、オーボエの安原太武郎をソロに迎えたプログラム真ん

中の2番は、各々の洗練された響きの掛け合い、緊張感に圧倒された。

繊細で柔らかなザウターの演奏は秀逸。次の6番はテンポが遅めで緊張感

に少々欠けた。5番の華やかな超絶技巧を含んだチェンバロで最後をま

とめた。(5月17日、ザ・コンサートホール 名古屋・伏見・電気文化会館)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第469回定期演奏会(2019.6.15)

名フィル6月定演は、音楽監督・小泉和裕の指揮により、彼の十八番とする作品から「危機の傑作」をテーマとした選曲。ドヴォルザークの『序曲・謝肉祭』から始まり、切れ味よいリズム感で金管、打楽器でお祭り気分盛り上げ華やかに1曲目を終える。2曲目のグラズノフの『ヴァイオリン協奏曲』のソリストには、音楽監督の小泉が共演を切望した若手の注目ヴァイオリニスト、クララ//ジュミ・カン。ヴァイオリン独奏は、哀愁漂う優雅な旋律を歌い込み、2楽章の重音奏法を駆使したカデンツァを華麗に弾きあげ、色彩豊かなオーケストラに駆け込んだ。彼女のアンコールを期待する観客の拍手がなかなか止まなかった。次回の共演が楽しみである。後半は、小泉のお得意とするシューマンの『交響曲第2番』。シューマン特有の重厚な音響を生かし、バランスよくダイナミックに歌わせて観客を魅了した。

(6月15日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

中部フィルハーモニー交響楽団創立二十周年プレコンサート(2019.6.16)

芸術監督、首席指揮者である**秋山和慶**による『ドイツ3大B名曲コンサート』。

日本音楽界を代表とするベテラン、秋山と、ソリストとして迎えられたヴァイオリンの**前橋汀子**による記念公演。通称「G線上のアリア」を2曲目に含んだ**バッハの名曲のひとつ『管弦楽組曲第3番』**から荘厳に始まる。全曲通して華やかで高貴な雰囲気、漂う祝祭的な作品で、記念公演らしく清々しくまとめあげた。2曲目は、ベートーヴェンの『ヴァイオリン協奏曲』。前橋を聴きにきた観客が多かったようで、1楽章のカデンツァを含み、貫禄のある深みのある演奏に拍手喝采。アンコールのバッハの『無伴奏ヴァイオリンのためのソナタハ長調』からラルゴで、更に観客を魅了。最後は、2017年の「ブラームス・ツィクルス」で高評価を得ている秋山による重厚な響きにより構築された**ブラームスの『交響曲第1番』**。秋山の熟練の緻密な構成力による指揮により、3曲の大作を完成度の高い演奏で最後まで楽しめた。

(6月16日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第470回定期演奏会(2019.7.6)

7月定期は、常任指揮者退任後初となるマーティン・ブラビンスの登場で得意とする現代音楽、英国音楽によるプログラム。1曲目は、2年前に委嘱作品で初演を予定されていたものの指揮者の都合で延期となっていたブラビンスに捧げられた藤倉大による『グローリアス・クラウズ』。今年の尾高賞受賞作品でもある。アイデアとなっている微生物の蠢きを想像させるように絶えず複雑な音群は交錯し神秘的な音響を繰り広げる。藤倉作品の理解者でもあるブラビンスにより繊細で緊張感のある音響世界を構築。2曲目は、若手ピアニスト、ジャン・チャクムルによるメンデルスゾーン『ピアノ協奏曲第2番』。出だしの研ぎ澄まされた音色からピアニストの繊細で並外れた音楽センスを感じた。アンコールは、母国トルコのファジル・サイの民族楽器、ジャズ風な響きの『ブラック・アース』。後半はエルガー『交響曲第1番』。重厚な音

響をいかした壮大な世界を展開した。(7月6日愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

セントラル愛知交響楽団 第170回定期演奏会 (2019.7.12)

中野振一郎（チェンバロ、指揮）による3回にわたるセントラル愛知との共演最終回は、ヘンデル特集。歌劇《セルセ》より序曲とジークから歯切れよい旋律にのって1曲目が始まる。前半はヘンデル40歳代の作品として、《合奏協奏曲イ長調》、大西宣人によるフルート、ピッコロソロを含む《水上の音楽・第3組曲》と渋めの色彩でまとめる。後半の《水上の音楽》第1と2組曲は、30代に作曲された明朗で軽快な旋律により若々しきで活気溢れる。コンサートマスターの寺田史人を始め豊かな弦楽器群の響きにバランスよくオーボエ、ファゴット、ホルン、トランペットが加わり華やかな彩りを散りばめた。中野による曲間のヘンデルにまつわるエピソードも観客を和ませた。今回の中野によってプロデュースされたバロック作品特集では、今までにないセントラル愛知の魅力が定期公演で見られた。今後もしも続けてもらいたい企画である。

（7月12日、ザ・コンサートホール名古屋・伏見・電気文化会館）（伊藤美由紀）

愛知祝祭管弦楽団 ワーグナー楽劇《神々の黄昏》序幕と全3幕

愛知祝祭管弦楽団が4年かけて完成させた《ニーベルングの指環》4部作最終章。昨年始めて彼らの演奏を聴きアマチュア・オーケストラの熱意、達成度の高さに驚いた。昨年は歌舞伎などの劇を行う会場であったこともあり音響の悪さが耳についたが、今年はリニューアルした愛知芸術劇場での開催となり音響もバランスよくまとまった。オーケストラの役割に大きなウェイトがおかれている難関な4部作最後。メンバー各々のワーグナーの「指輪」全てに共通する示導動機、音楽に対する理解度も更に深まり、その効果が音楽にも表現されていた。音楽監督であり指揮者の三澤洋史の指導、熱意による賜物であろう。佐藤美春・演出は、1階舞台とパイプオルガン前の2階席を場面ごとにうまく使い分け、各幕の異なった照明やオルガンの存在と飾り付けにより荘厳な神々しさを醸し出していた。2幕に登場する愛知祝祭合唱団による男性合唱は、階席に位置し、オーケストラ、ソリストと多層的に絡み合い、視覚的、

音響的にも舞台を効果的に使いこなした。ブリュンヒルデ役の基村昌代は、全幕を通してソロ、二重唱、三重唱で、様々な状況での感情表現を歌いきる。ハーゲン役の成田眞の威厳のある表現力も、全幕通して舞台を引き締めた。大久保亮（ジークフリート）、大森いちえい（アルベリヒ）、初鹿野剛（グンター）、大須賀園枝（グートルーネ）、三輪陽子（ヴァルトラウテ）他、愛知県に關係のある歌手を中心に壮大な響きの世界を構築した。来年度も既に4部作のダイジェスト版公演が予定されており、三澤洋史の更なる意欲が感じられる。

（8月18日、愛知芸術劇場コンサートホール）（伊藤美由紀）